

佳作

## 「誰か」に届ける感動

東京都 東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校一年 瀧野乃花

私には会ったことがない、名前だけしか知らない人生の恩人がいる。これまでにないピンチから私を救ってくれた人だ。普段、当たり前のように行なっている「食べる」という行動。私はその「食べる」を通して救われたのだ。

もともと私は食べることが大好きで、嫌いな食べ物もほとんど無く、食の悩みとは無縁だった。しかし、食べることが大好きだった私が「食べる」ことを恐れるようになってしまった。これは私が中学一年生のときの話だ。私はピアノを習っていて、勉強と両立する必要があったが、中学に入ると、勉強もさらに難しくなり、今までより、どちらも自分が納得できるまでやるのは精神的にも、体力的にも大変だった。忙しい生活を送っているうちに、次第に体調が悪い日が増え、入学して半年が経った頃、とうとう心身ともに限界を迎え、学校に行くことができなくなってしまう。恐怖症によるパニック発作が原因となり、一つ一つのことに恐怖を感じ、何もすることが

できなくなってしまう。今、ここに自分が生きていると感じることが怖くなったのだ。勉強やピアノにも一切触れることができず、また、大好きだった学校に行けなくなってしまうというショックから、ただ一日が終わるのを待つだけの生活になった。このとき、初めて「食」の悩みが生まれた。「食べる」という感覚が怖いと思うようになってしまったのだ。あれほどに好きだった食事でも泣きながら食べるようになった。家族からは心配され、私自身も痩せ始めていることや、これからずっと食べられなかったらどうしようという焦りがあったが、それでも食べることができなかった。

しかしある日、また今までのように「おいしい」と感じてご飯を食べられるようになるきっかけとなったことがあった。それは、父の仕事のお得意先から頂いた焼菓子の詰め合わせだった。その方は、父から私の話を聞いて、会ったこともない私のために、大きな箱いっぱいのお菓子をプレゼントしてくれたのだ。今まで見たことのないほどの大きな箱だった。ずっと冷めてしまっていた私の心が一気に温かくなった。まだあまり食べられないままであったが、一つ食べてみることにした。その一口で全てが変わった。久しぶりに「おいしい」と思えたのだ。心の底から嬉しかった。両親に「食べられたよ」と泣きながら伝えたことを覚えている。怖いという感情は一切なかった。その感情を忘れるくらい、とにかくおい

しかった。これが私の人生で一番の感動だ。それから私は、溢れるほどのお菓子を毎日食べた。これがきっかけで、これまで恐怖を抱いていたことがまるで嘘のご飯もしっかり食べられるようになり、前を向けるようになった。

数ヶ月後、私は学校に行けるようになった。久しぶりの学校は緊張し、勉強もかなり遅れをとっていたため、精神、体力ともに疲れていた。その頃、お菓子をくれた方から、またプレゼントを頂いた。大きな熊のぬいぐるみだった。心が沈んでいるときは、どのようなものか、いか、何色がいいのか、調べて選んでくれたそう。知らない「誰か」のためにこんなにも親切にしてくれる人がいるのか、と私の心はまた温かくなった。不安な夜も、その熊のぬいぐるみに抱きついた。私は学校に行くのが当たり前になるまで元気になった。

私を救ってくれた人には、いまだに会ったことがない。でもいつか、直接お礼を伝えたいと思っている。私はこれがきっかけで夢ができた。ピアノで「誰か」を救うということだ。コンサートのお客様には自分の知らない人もいっぱい座っている。その中には、悩みや苦しい思いをしている人もいるかもしれない。そのような人たちが、辛い気持ちを我慢して人に伝えたり、相談をして嫌なことを言われて傷ついたりせず、ただ音を通して救うことができるのが音楽だと思う。ピアノを弾くことで、人に

「感動」を与えて、一人でも「誰か」の心を温められたらいいと思う。